

趣旨説明

末 木 文美士

近代の日本の仏教学は、欧米やアジアに留学した先駆者たちの力によりきわめて高度に発展し、世界に誇る数多くの成果を上げてきた。その主力はインドを中心とした文献学的な解明にあり、写本の解読、テキストの解釈、思想の分析という手順で、人文学のモデルとも言える厳密な方法を確立した。その方法は今日でもなお継承・発展を続けており、いち早いコンピュータ利用なども含めて、新たな成果が次々と上げられている。領域的にも、当初のインド仏教中心から、チベット仏教、東アジア仏教にも広げられ、古い仏教観は次々と塗り替えられている。しかし、それだけに研究が専門化・細分化して、専門家でもなかなかその全領域には理解が及ばない。ましてその成果が、専門外でありながら仏教に関心を持つ他分野の研究者や知識人まで伝わるのは難しい。そこで、一方では研究のタコソボ化が進み、閉鎖的となる危険を孕むと同時に、他方では他分野の研

究者や知識人の持つ仏教観と齟齬が生ずることも少なくない。もともと比較思想学会は、中村元初代会長、玉城康四郎二代目会長をはじめとして、インド哲学仏教学の研究者がその重要な一翼を担ってきた。それは、西洋的な思考と異なるインド思想や仏教という高度な宗教／哲学を現代という場にもたらずとで、西洋中心的な思想的営為を根本から問い直すという大きな意図に基づくものであった。こうした先駆者の広い知見を取り戻し、仏教学の成果をより広い分野との交流の中で比較思想的に捉え直し、改めて検証していくことが、今日避けられなくなっている。

本パネルは、このような意図のもとに、今日の先端的な仏教研究を担いながら、同時に比較思想的な問題意識を持つ発表者・コメンテータらによつて構成され、議論を深めることを目的としている。護山真也は、インド大乘仏教の認識論を中心にし

ながら、それを現代の分析哲学と比較する研究を進めている。師茂樹は、現代の方法論的反省を踏まえながら、インドの唯識思想や論理学がどのように東アジアに継承され変容されてきたかという観点から成果を上げている。末木文美士は、日本仏教を中心としながら、それを広い思想史の中に位置づけ、その特徴と問題点を説明しようとしている。以上の三名がそれぞれの研究に基づいて発表し、それに対して、人文学の大きな視野から仏教学のあり方に問題提起をしている下田正弘が司会・コメントを担当する。仏教学という特殊な一分野の研究が、比較思想という普遍的な場とどのように関わり得るかを探り、その両分野の今後に新たな方向を見出したい。

(すえき・ふみひこ、仏教学・日本思想史)

国際日本文化研究センター名誉教授)